

—特集〔国内・国際災害医療と日本医大：令和6年能登半島地震とガザ紛争対応報告（9）〕—

日本医科大学付属病院8次隊（溝渕隊）総括

溝渕 大騎

日本医科大学付属病院高度救命救急センター

はじめに

2024年1月1日16時10分最大震度7を観測する令和6年能登半島地震が発災した。日本医師会から派遣要請があり、1月21日から1月24日まで東京都日本医師会災害医療チーム（Japan Medical Association Team：JMAT）5次隊（日本医科大学付属病院8次隊）として能登町小木地区において医療支援活動を行った。活動記録を以下に報告する。なお、日本医科大学付属病院8次隊のメンバーは下記のごとくである。

溝渕 大騎 日本医科大学付属病院 高度救命救急センター 医師

高橋 應仁 日本医科大学付属病院 心臓血管集中治療科 医師

竹洞 友香 日本医科大学付属病院 高度救命救急センター 看護師

栗原 有貴 日本医科大学付属病院 薬剤部 薬剤師

堀内 矯平 日本医科大学付属病院 高度救命救急センター 救急救命士

1. 1月21日（日）

7時00分日本医科大学付属病院を出発、7時26分上野発上越・北陸新幹線かがやき503号に乗車、9時26分定刻通り富山駅に到着した。レンタカーで公立穴水総合病院（石川県JMAT能登北部調整支部）を経由し

能登町立小木中学校（避難所）を目指した。

高岡から七尾までは能登自動車道を走行し、以降は高速道路通行止めがあり国道249号を走行した。国道249号はすでに道路の補修工事がされており片側交互通行はあったが、通行止め・迂回はなく走行可能であった。13時35分JMAT北部調整支部に到着しチェックインを行った（図1）。日本医大はJMATとして5次隊で、4次隊から小木中学校避難所を引き継ぐ旨を本部で確認した。また、支部では宿泊ホテルについて聞かれ、日本医大が小木中学校避難所に寝袋で泊まり込んでいる情報も伝わっており、情報伝達の強化が必要と思われた。15時10分に小木中学校に到着、その後日本医科大学付属病院7次隊から8次隊への引継ぎが行われた。われわれは、引き続き小木中学校避難所、小木支所臨時福祉避難所、小木地区における医療支援を行うこととなった。

申し送り時点で避難者100人弱、隔離避難者2人、救護所受診は1日数人であり避難所の医療ニーズとしては落ち着いていた。

4次隊から石川県JMAT本部支部会議（Web）に出席しており、われわれも参加した。石川県JMAT本部と3つの支部（金沢以南、能登北部、七尾）の会議であった（図2）。

小木地区は小木クリニックを中心に医療体制を整えている件、JMATの継続した支援の必要性、小木クリニックの発熱外来にJMATが入り助かっている件、小



図1 JMAT 北部調整支部（穴水総合病院）にチェックイン



図2 石川県JMAT 本部支部会議参加（Web）



図3 高橋医師によるフレイル体操

木支所に福祉避難所ができた件を伝えた。能登町全体の診療所、病院がどこまで機能しているのか質問があったが把握できておらず、本件に関しては能登北部調整支部から翌日JMAT隊を1隊出し調査する方針となった。石川県JMAT本部、能登北部調整本部とわれわれの連携が不十分で、能登町の状況があまり伝わっていなかった。

2. 1月22日(月)

前任からの引継ぎ通り、救護所の診療業務、朝夕2回の医療班ミーティング(JMAT, 災害支援ナース, 瀬島医師), 2回の避難所巡回(JMAT, 災害支援ナース, DWAT, 保健師), 朝1回感染部屋巡回, 朝1回の小木支所臨時福祉避難所巡回(JMAT), その他に避難所運営会議参加, フレイル体操実施(図3), 避難経路の確認, 石川県JMAT本部支部議(Web)参加を行った(図4)。

また, 前日の石川県JMAT本部支部会議で議題に上がった能登町全体の診療所の診療状況に関して, 能登北部調整支部からは調査のためのJMAT隊は出せないことになり, われわれの隊で調査することになった。

能登町内ですでに情報の豊富な診療所を除き, 能登町内5診療所を訪問し現状調査を行った。調査内容に関しては広域災害・救急医療情報システム(以下EMIS)にwebでの入力を考えていたが, いずれの診療所もEMIS内に存在しておらず入力できなかった。いずれの診療所も診療時間を制限していた。薬剤は充足していたがレントゲンや診療システム端末などの被害があり診療内容に制限のある診療所もあった。往診に関してはもともと行っていたが行えていない診療所があった。建物や医療機器の損壊などがあり, 再建に向けて経済的に厳しいという意見もあった。まだまだ,

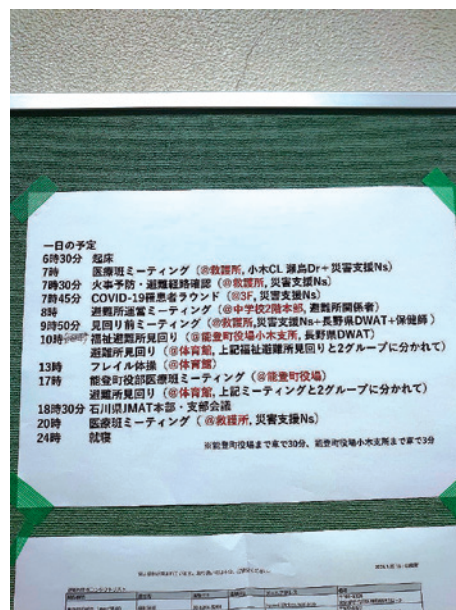


図4 1日のスケジュール

通常の医療を提供できる段階ではないと実感した。内容はJMAT 能登北部調整支部に報告し共有した。また, 小木中学校避難所に関しては避難所救護所としてのニーズは減っているが, 能登町全体の医療支援・調整としてのニーズはあり継続してJMAT 1隊の常駐の必要性を北部支部に伝えた。

3. 1月23日(火)

朝の感染部屋巡回で1人の隔離解除を行い隔離避難者は0となった。

また, 小木支所臨時福祉避難所の巡回では作成した地震・火災発生時のマニュアルを配布し共有した。10時JMAT 能登北部調整支部からわれわれの隊以降は日本赤十字社救護班(日赤)が小木地区の避難所を引き継ぐという連絡を受けた。能登町役場の日赤と連絡が繋がらず, 直接能登町役場を訪れた。日赤としては避難所の巡回を行う予定で救護所には駐在しないということ伝えられ, 小木中学校避難所救護所の閉鎖が決まった。救護所閉鎖に伴い, 関係各所と調整を図り撤収作業を行った。救護所は名称を健康相談室に変更し, 災害支援ナースの方々に引き継いでいただいた(図5)。

4. 1月24日(水)

7時医療者ミーティングを行い, 救護所閉鎖後の感染者発症時の対応について確認した。8時避難所運営ミーティングで救護所閉鎖について説明を行った。

8時43分小木中学校出発, 18時45分日本医科大学



図5 瀬島医師（小木クリニック）、災害支援ナース（長野県）と共に

付属病院に到着し解散した。

5. まとめ

われわれ日本医科大学病院8次隊は1次隊から継続した小木中学校避難所救護所での最後の活動を行った。先行隊により救護所運営や感染対策は確立されていた。その結果、活動期間中に感染隔離者は0人となり制御できた。適切な感染隔離対策が功を奏したと考えられた。急に救護所を閉鎖することになったが、健康相談室と名称を変更し継続した感染対策を災害支援ナースの方々に引き継いでいただいた。また、発災から3週間が経過しており、救護所受診も1日に数人と落ち着いていた。

しかし、能登町全体でみると発熱外来を行っている診療所を受診する患者の半数がCOVID-19やインフルエンザであり、流行が認められた。また、調査できた診療所はすべて診療時間を制限しており、往診もでき

ておらず継続した医療支援の必要性を感じた。現行のシステムとして、診療所情報を共有するためのEMISにそもそも診療所が存在せず、情報共有を難しくしていた。

われわれの隊は比較的、災害医療支援の経験が浅く、隊の第一の目標を安全な活動とした。無理のない活動を心掛け、結果、健康な状態で帰還することができた。

（受付：2024年4月7日）

（受理：2024年5月30日）

日本医科大学医学会雑誌は、本論文に対して、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際（CC BY NC ND）ライセンス（<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>）を採用した。ライセンス採用後も、すべての論文の著作権については、日本医科大学医学会が保持するものとする。ライセンスが付与された論文については、非営利目的で、元の論文のクレジットを表示することを条件に、すべての者が、ダウンロード、二次使用、複製、再印刷、頒布を行うことができる。